

定名詞句の指示と対象同定のメカニズム
 Référence définie et mécanisme de l'identification du référent

東郷雄二 (TOGO, Yuji)

Le présent article a pour objet de situer l'emploi dit "intensionnel" ou "quasi-intensionnel" du syntagme défini du type *le N* qu'on observe dans des exemples tels que *Sonnez. Le boucher vous servira*, *J'ai abîmé l'aile de la voiture* dans la problématique de la référence définie. En nous basant sur l'hypothèse selon laquelle le défini ne "réfère" pas, mais véhicule une présupposition existentielle, nous montrons que l'emploi "quasi-intensionnel" du type *l'aile de la voiture* correspond à un mode d'existence de l'objet en tant que "fonctionnel", qui exige une identification qui n'aboutit pas à relever un individu. Ce mode d'existence n'implique pas nécessairement l'unicité du référent, d'où l'article défini au singulier dans *l'aile de la voiture*. L'emploi "intensionnel" du syntagme défini met en jeu un mécanisme plus complexe. Nous définissons le syntagme défini comme une fonction qui projette des "circonstances d'évaluation" sur l'extension. Dans le cas de *Sonnez. Le boucher vous servira*, l'impératif ouvre une circonstance d'évaluation dans laquelle est impliqué un boucher qui donne des conseils au client qui a sonné, d'où le singulier *le boucher*, malgré qu'il se trouve six bouchers au rayon.

キーワード：定名詞句の指示 (référence définie), 内包的用法 (emploi intensionnel), 値踏みの場 (circonstance d'évaluation), 存在前提 (présupposition existentielle), 唯一性 (unicité)

0. はじめに

本稿では定名詞句の「内包的」用法,あるいは「半内包的」用法とされる次のような例について,定名詞句の指示のメカニズムを考察する¹⁾.

- (1) *Le chat est carnivore.* (Martin 1986)
- (2) *Sonnez. Le boucher vous conseillera.* (Ibid.)
- (3) a. *J'ai abîmé l'aile de la voiture.*
 b. *J'ai heurté le coin du bureau.* (Corblin 1987)

Martinは例文(1)について,定冠詞 *le* は「内包的」用法で,*le*は定名詞句 *le chat* の内包をさすとする。「内包」とは猫を猫たらしめている「属性の集合」というほどの意味である。例文(1)は,*carnivore*という述語の表す属性が,*le chat*の内包の一部をなすことを言明している。総称文であるこの例の分析は一応妥当なものとしておく。

問題は例文(2)である。この例文は,ガラスの向こうで6人ほどの肉屋が働いているスーパーマーケットの精肉売り場の張り紙である。ふつう定名詞句には唯一性の含意があるとされている²⁾。*Le soleil brille.*で太陽に単数の定冠詞がつくのは,世界に太陽がひとつしかないからだと説明される。Russell(1905)は定名詞句の論理的意味を次のように表現した。

- (4) a. *The professor is drunk.*
 b. $\exists x (P(x) \wedge \neg \exists y (P(y) \wedge x \neq y) \wedge D(x))$ ³⁾

この定式化により次の3点が表現される。

- (5) a. existence : there is a professor [$\exists x (P(x))$]
 b. uniqueness : there is only one professor [$\neg \exists y (P(y) \wedge x \neq y)$]
 c. predication : this individual is drunk. [$D(x)$]

このうち、定冠詞の表す意味として重要なのは、a. と b. である。a. によって指示対象の存在が言明され、b. によってその唯一性が示される。一方、Russell によれば不定名詞句は次のように定式化される。

- (6) a. *A professor is drunk.*
 b. $\exists x (P(x) \wedge D(x))$

この式が表しているのは、“There is a x who is a professor and x is drunk.” という意味で、Russell は定名詞句と不定名詞句をわけるものは、唯一性であるとした。

ところが例文 (2) では、肉屋はその場に6人いて、どの肉屋も客の対応をする可能性がある。このように複数性が明らかな文脈・状況で、なぜ唯一性を前提とする定冠詞の単数形が用いられるのかは説明を要する問題である⁴⁾。Martin はこの *le boucher* を「内包的用法」としている。Martin によれば、内包的用法は (1) のように無限定的に用いられることもあるが、適用される *univers de discours* がなんらかの理由により狭められることもある。次は古代エジプトという特定の時空間に限定された内包的用法であるという。

- (7) Dans l’Egypte ancienne, *le chat* est entouré d’un grand respect. (Martin 1986)

Martin は例 (2) もこれと連続的だと見なしている。すなわち *le boucher* もまた「内包的」だとして、例 (1) (2) を「内包的総称」*générique intensionnel* に分類している。

Furukawa & Naganuma (2000) は、例文 (1) についての Martin の分析を支持する一方、例 (3) のように $\langle N_1 \text{ de } N_2 \rangle$ 型の属格を従えた定名詞句を「半内包的用法」だとする。ちなみに「半内包的用法」の特徴は次のようなものだという。

- (a) 後方照応であり、外延的用法である。
 (b) 指示対象の唯一性が絶対ではない。
 (c) 指示対象の個性性は背景に退き、内包が前面に出てくる。

例(3)で自動車のフェンダーや机の角はひとつではないのに、単数定冠詞が用いられているのは、半内包的用法だからだという分析である。確かにここでは Russell により定冠詞の条件とされた指示対象の「唯一性」がキャンセルされているのは事実である。

1. 「内包説」の問題点

例 (2) (3) が問題になるのは、従来からの定名詞句のどの用法にも収まらないからである。定名詞句には一般に次の用法があるとされてきた。例 (2) (3) はどの用法にも該当しない。

- (a) 前方照応 *Un homme descendit du train. L’homme portait une valise noire.*
 (b) 後方照応 *Ne soyez pas l’hypocrite qu’il y a dans ce livre.*

- (c) 外部指示 *Ferme la porte.*
- (d) 総称 *L'homme est mortel.*
- (e) 唯一物 *Le soleil se couche à l'horizon.*
- (f) 連想照応 *Nous avons pris un taxi. Le chauffeur était ivre.*

このように、総称ではなく、特定の文脈・状況下で用いられていて、指示対象の複数性が明らかなのに単数定冠詞が現れる現象は、研究者の注目を集めてきた。古くは英語冠詞論の古典 Christophersen (1939)はこれを「謎」だとするに留まり説明を諦めている。

- (8) “Still more strange is the sentence : *towards evening we came to the bank of a river.* Every river on earth inevitably has two banks. Here, however, only *the* is possible...”
(Christophersen 1939)

この問題を扱った先行研究としては、すでに言及したもの以外に、Galmiche (1989), Kadmon (1990), Birner & Ward (1994), Epstein (1999)などがある。

さて次のような例を「内包的」と分析することの問題点を考えてみよう。

- (9) *Il y a un robinet qui fuit dans la salle de bains, il faut faire venir le plombier.* (Furukawa 1997)
- (10) *Quand le héros s'est approché du château, il a vu son amie près de la fenêtre.*
(de Mulder 1984)

Ogden & Richards (1923) の意味の三角形では、Symbol は指示表現 (ここでは定名詞句), Thought or Reference は内包, Referent が外延 (言語外的指示対象) に対応する。内包的用法とは、Symbol から Thought or Reference までの関係は成立しているが、その段階にとどまっておき、Thought or Reference から Referent に至る関係が成立していない状態である。このように外延世界の指示対象の確保にまで至らない用法は、「非指示的用法」とも呼ばれている。その典型は次の例である。

- (11) a. He did some *deer*-hunting.
- b. He is a *high school* teacher.
- c. Cet homme est *le secrétaire particulier du président.*

複合名詞句の一部として抱合されたり (a.), 形容詞的に用いられ (b.), 非指示的位置である属詞位置で用いられると (c.), これらの名詞 (句) は外延に指示対象を持たない。その意味への寄与は記号の持つ内包によるものであり、これは確かに「内包的」用法である。

しかし、例 (2) の *Le boucher vous conseillera.* をこれと同じように考えることはできない。客が呼び鈴を鳴らすと、そこには応対をする肉屋が現実に現れるのであり、その肉屋はガラスの向こう側にいる6人の肉屋のうちの誰かなのである。内包としての肉屋が客の応対をすることはない。客の相手をするのは、あくまで現実世界に外延を持つ肉屋でなくてはならない。同じく例 (10) でも「内包」としての窓に寄りかかるわけではない。

また例(3)について, Furukawa & Naganuma が提示した「半内包的」用法にも類似した問題を指摘できる. この用法は「後方照応的であり, 外延的である」とされいながら, 「内包が前面に出てくる」とされているが, これは語義矛盾ではなかろうか.

2. 指示説と存在前提説

定名詞句の機能については, 「指示説」と「存在前提説」とが対立してきた (Ducrot 1972, Kleiber 1983, Hawkins 1991). 指示説では, 定名詞句 *le N* は *N* の内包を通して外延に存在する対象 *a* を指示すると考える. 存在前提説では, 定名詞句 *le N* は, *N* の記述に一致する対象がどこかに存在するという前提を持つだけで, *a* を指示したりはしないとする.

- (12) a. *L'homme qui a déterminé l'orbite des planètes est mort dans la misère.*
b. *Le roi de France est chauve.*

指示説に従えば, (12) a. の *l'homme qui a déterminé l'orbite des planètes* は Kepler を「指示」し, b. の *le roi de France* は大革命以前の時点ならその時代の国王を「指示」し, 現代の時点で考えるならば指示を持たない. 指示表現の機能を内包と外延という概念を用いて分析する立場は, 基本的に指示説に立脚している.

指示説がうまく機能するには, 話し手の用いた定名詞句 *le N* によって「指示」される対象を, 聞き手も同定できなければならない. 同定できる対象は, 先行文脈で既に導入されているか (前方照応的用法), 発話の現場に存在しているか (現場指示的用法), 話し手も聞き手もよく知っているものでなくてはならない (共有知識による唯一物などの用法). ここから Christophersen の familiarity による説明や, Damourette et Pichon による notoriété による説明が生まれるのである. しかし指示説では説明の難しい用例がある.

- (13) a. *I had to get a taxi from the station. On the way the driver told me there was a bus strike.* (Lyons 1999)
b. *They've just got in from New York. The plane was five hours late.* (*Ibid.*)
c. *Est-ce que le facteur est passé ?*

(13) a. は *a taxi* → *the driver* の連想照応である. 聞き手はこのタクシーの運転手を知らないので familiarity / notoriété はない. それでも *the driver* は聞き手にとってその運転手を「指示」していると言えるのだろうか⁵⁾. b. はさらに困難な例で, この文の聞き手は「彼ら」が飛行機で来たということすら知らないのだが, 聞き手にとって *the plane* が特定の飛行機を「指示」すると言えるだろうか. c. がもし郵便屋が一人しかいない田舎で発話されたのなら, *le facteur* は唯一の指示対象 (例えば Jacques) を指すと言えるだろう. しかしこの文は, 郵便配達員が大勢いる都会でも発話可能である. このとき *le facteur* は「指示説」論者が言うように, 同定可能な指示対象を「指示する」と言えるのだろうか. いずれも不可能なことは明らかである. 指示説はここで座礁するのである.

存在前提説では, 指示説の暗黙の条件となっている「既知性」 familiarity / notoriété は必要とされない. 本稿では, 定名詞句の伝達するのは存在前提であり, *le N* はその指示対象

が「どこかに存在する」ことを意味するに過ぎないとの立場を採る⁶⁾。le Nの使用条件は、「既知性」 familiarity / notoriétéではなく「同定可能性」 identifiability である。

3. 指示対象の存在論

存在前提説に立脚して、定名詞句がある世界に存在前提を持つとしても、聞き手は何らかの手段を用いてその指示対象を同定することが求められている。するとただちに問題が生じる。例(2)の le boucher は、売り場にいる6人の肉屋の誰でもよく、例(3)の le coin du bureau は4つある机の角のどれでもよい。ならば、聞き手はどの肉屋か、どの角かを同定できないではないかという疑問が湧く。ここで、指示対象の存在様態と同定の関係を考えよう。Fraurud (1996)は名詞句の指示対象には3種類の存在様態があることを主張した。まず Individuals は最も個性性の高い存在で、Who? / Which one? の答となる (ex. *Charlie Muffin tried to prove his innocence in vain.*) この典型は固有名である。次に Functionals は談話世界内の他の存在 (anchorと呼ぶ) との関係において存在が認定され、Whose? / Of whom (which)? の答となる。例えば *the postman [of a certain district] [at a particular day]*, *the mother [of someone]*, *the author [of a book]*, *the windscreen [of a car]* などである (カッコ内が anchor)。最後に Instances は個体としてではなく所属するカテゴリーの成員としてのみ存在が認定され、What? の答となる (ex. *He gave me a glass of wine.*)。

それぞれの存在様態の対象の同定に必要な知識は異なる。Individuals の同定に必要なものは個体に関する token 知識である。Functionals と Instances の同定には token 知識は必要ではなく、type 知識で十分である。type 知識はアンカーとの関係を示す relational 知識と、所属するカテゴリーに関する sortal 知識に下位分類される。この知識はそれぞれに対応する「同定の深度」を決定する。Individuals の同定には、その指示する個体に関する token 知識が必要であり、token 知識が欠如した状況では、対象の同定に至らない。Individuals は最も深い同定を必要とする。次の例で Renzo Piano についての token 知識を持たない聞き手 B は同定に成功しない。

- (14) A : J'ai rencontré *Renzo Piano* hier à l'Opéra.
B : Qui est *Renzo Piano* ?

一方、Functionals や Instances では、これよりも浅い同定で十分である。

- (15) J'ai amené *ma voiture* dehors. Voulez-vous réparer *le carburateur*?

外に車を停めて修理工場で上の文を発話するとき、聞き手の修理工にとって話し手の車は視野になく、どんな車か何色かといった車に関する token 知識はない。にもかかわらず *ma voiture* は、話し手の「私」との関係で *la voiture [de moi]* という Functionals として「同定」され、これで十分である。また *le carburateur* は連想照応の例であるが、これも *le carburateur [de ma voiture]* という Functionals として浅く同定される。指示説では説明の難しい(13)の *a taxi* → *the driver* の連想照応や、*le facteur* の問題は、このように同定の深度を設定することで正しく解決することができる。

Functionals としての浅い同定の場合、指示対象の唯一性は必ずしも含意されない。厳密な意味での唯一性は、個体である token に関してのみ成立するものだからである。(15)の *ma voiture* は、私が車を一台しか所有していないことを意味しない。同様に *Est-ce que le facteur est passé?* でも、郵便配達員がひとりしかいないことにはならない。

Functionals は関係概念に基づく浅い同定なので、個体同定にまで至らない。このため、定冠詞がついているにも関わらず、時に不定名詞句と同じ振る舞いをする事が知られている。Lambrecht (1994) は例(16)で *the daughter of a king* は唯一性を含意せず、王様に娘が何人いても発話可能だとしている。この型の名詞句が不定名詞句のように振る舞うことは、非人称構文の実主語の位置に生じるという事実が示している (例17)。

(16) I met *the daughter of a king*. (Lambrecht 1994)

(17) a. Il est entré un roi.

b. *Il est entré le roi.

c. Il est entré *la fille d'un roi*. (Ibid.)

Furukawa & Naganuma (2000)が半内包的用法とした例(3)は、典型的な関係型 Functionals の例である。このように指示対象が複数あるのに単数形定冠詞が用いられ、かつ個体同定にまで至らない指示のタイプは、「半内包的用法」という語義矛盾を含む呼び名ではなく、関係型に基づく浅い同定と見るほうがよい。

4. 「値踏みの場」と定名詞句

さて、ここで冒頭の例 (2) *Le boucher vous conseillera.* に戻ろう。 *l'aile [de la voiture]* のようにアンカーとして機能するものがここにはないので、関係型と見なすことはできない。上とは別の説明原理が必要である。なぜここでも定名詞句が前提とする唯一性の条件が働かないように見えるのだろうか。

さきに定名詞句の意味論として、本稿では「存在前提説」に立脚すると述べた。存在前提説とは、*le N* の指示するものが「どこかに存在する」という主張である。故意にぼかしてあるように見えるこの主張の根底には、定名詞句 *le N* 自体には、その指すものが「どこにあるか」を指定する働きはないという前提がある⁷⁾。ここでもう一度 Russell の例を思い出そう。 *The professor is drunk.* において、 *the professor* の指示対象の唯一性を最も広い存在領域において解釈すると、「この世界には *professor* は一人しか存在しない」という意味になり、これは明らかに偽である。唯一性の前提が適用される存在領域は、談話的にもっと狭く限定されなくてはならない。定名詞句の指示を考える場合には、「指示領域の局所性」を考慮しなくてはならないのである。これは定名詞句の意味論の核心である「存在前提」とペアで働く概念である。ここで強調しておきたいのは、指示領域の局所化がどのような理由で行われるのか、また指示がどの領域に限定されるのかを指定する働きは、定名詞句の意味論自体には含まれないという点である⁸⁾。Kleiber (1986) の例をみよう。

(18) a. Attention à *la voiture* !

b. # Attention à *cette voiture* !

c. # Attention à une voiture !

道路を横断しようとしている人に向けられる発話としては、a.のみが適格である。ここで自動車は初めて言及されるので、前方照応的存在前提は持たない。また道路には車がたくさん走っているのだから、唯一性の前提もない。横断している人は自動車に気がついていないのでfamiliarityもない。なのに単数定冠詞が適格なのは、発話の現場という制約により、指示領域が局所化されているからである。その局所化された場で、聞き手にぶつかりそうになっている自動車は一台しかないのだから、それは同定可能なのである。

ここでKaplan (1989)の用語を用いて、話し手が発話を行なう場合をContext of use「発話状況」、談話文脈や発話の状況によって作り出され、指示対象が存在する最小の談話領域をCircumstance of evaluation「値踏みの場合」と呼ぶことにしよう⁹⁾。「発話状況」とは話し手とそのhic et nuncに依存する要素を含み、指しし行為や指示詞によって、指示対象の直接指示を可能にする場である。発話状況における直接指示では、指示された対象がそのまま命題の入力になる。「値踏みの場合」とは、命題の真偽とその命題で用いられた指示表現の適切性が判断される領域である。値踏みの場合、仮想世界や話し手の願望の世界など、モダリティー操作によって開かれることもあれば、例(18)のように発話の場によって形成されることも、言語文脈内での特定の時点・エピソードへの言及によって成立することもある¹⁰⁾。値踏みの場合においては発話状況とは逆に、命題内容から間接的に指示対象が同定される。例(18)では、聞き手が道路を横断しようとしているという特定の時間と場所に限られた状況が、この発話の値踏みの場合である。定名詞句la voitureはこの値踏みの場合を指示領域とし、この場の内部でのみ解釈される。

ここで指示形容詞句cette voitureが不適格なのは次の理由による。ce Nは、話し手による発話状況からの直接指示であり、指示対象である車を「値踏みの場合」から取り出して、聞き手の注意をそれに向ける。ce Nが使われると、聞き手はce Nで指された指示対象を直接的に個体同定しなくてはならない。このため聞き手が個体同定に十分な情報を保持していないと、Quelle voiture?という質問を誘発してしまうのである。

一方、Attention à la voiture!のように定名詞句を用いた場合は、発話状況からの指示ではなく、値踏みの場合を通しての指示である。問題の状況では、道路を横断しようとしているところに接近している車が一台あるという存在前提が伝達されれば十分であり、「どの車であるか」という個体同定にまで至る必要がない。「車が接近中だ」という値踏みの場合の設定と、そのなかに含まれるla voitureの存在前提が伝達されればよいのである。同じことは次の例にも言える。(19)は家の門に張られた猛犬注意の張り紙である。(20) b. は塀の向こうにいる刑務所の看守Johnへの呼びかけ、(20) c. は目の不自由な人Harryへの注意である。いずれの場合も、定名詞句のさしているものは、聞き手には見えていない。この場合個体同定は不可能だが定名詞句のみが適格な形式である。

- (19) a. Beware of *the dog*.
b. ?Beware of *this dog*. (Lyons 1999)
- (20) a. Don't go in there, chum. *The dog* will bite you. (池内 1985)
b. John, catch *the jailbird*! (Ibid.)

c. Harry ! Mind *the table*. (Ibid.)

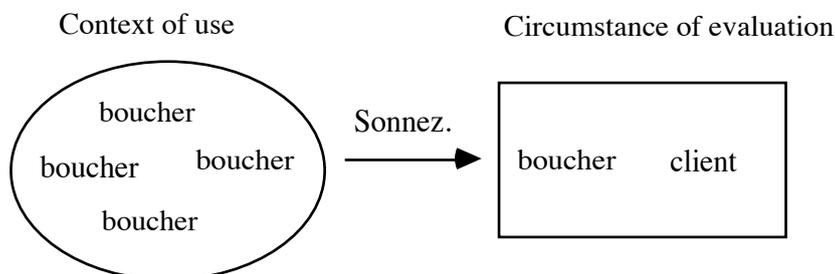
値踏み場を通しての定名詞句の用法には次の特徴が認められる。

- (A) 発話状況からの直接指示とは異なり、指示表現が用いられた命題内容からの「計算」によって指示対象が確保される。
- (B) 個体同定にまで至らない浅い同定で、「Quel N?」「Lequel?」という質問を誘発しない。
- (C) le Nの含意する唯一性は値踏み場で局所的にしか成立しない。言い換えれば当該の値踏み場を離れば、指示対象の候補は複数あってもかまわない。

実はこの「値踏み場を通しての指示」は、ふつうの談話で頻繁に行われているもので、特に珍しいものではないのである。次の *la chambre*, *le rideau*, *les fleurs* はこの例に該当する。この場合、値踏み場を構成しているのは、物語のなかの特定のシーンである。

- (21) Elle ouvrit les yeux. Un vent brusque, décidé, s'était introduit dans *la chambre*. Il transformait *le rideau* en voile, faisait se pencher *les fleurs* dans leur grand vase, à terre, et s'attaquait à présent à son sommeil. (F.Sagan, *Chamade*, Livre de poche)

さて、ここで冒頭の例 (2) の *Sonnez. Le boucher vous conseillera.* に戻ろう。結論から言えば、この例も値踏み場を通しての指示であり、個体同定を必要とせず、*le boucher* は局所的な唯一性しか含意しない。ここでは *Sonnez.* という命令形がひとつの値踏み場を開く重要なキューとして機能している。*Sonnez.* により開かれる場は、客が肉を買うために助言を求めるという場面である。*Le boucher vous conseillera.* の動詞の未来形は、開かれる値踏み場の文法的指標である。その値踏み場には、呼び鈴を鳴らして肉を買おうとしている客と、助言を与える肉屋が含まれる。定名詞句 *le boucher* は、この新たに開かれた値踏み場で、客に助言する肉屋を同定している。通常、客一人には店員が一人対応すれば十分であるという語用論的知識がある。従ってこの場に存在を前提されている肉屋は一人なのであるが、そのことは現実には奥の売場に何人もの肉屋がいることと矛盾しない。奥にいる肉屋は「発話の場」に存在しているのであり、*Sonnez.* によって開かれる「値踏み場」に存在しているのではないからである。図示すれば次のようになる。



le boucher を「内包的総称用法」であるとする Martin の分析は妥当ではない。*le boucher* は外延に指示対象を持たない内包的用法ではなく、確かに指示対象の存在を前提とするのである。ただし、その指示対象は *Sonnez.* によって開かれるであろう、まだ実現していない値踏み場にのみ存在前提を持つのである。

5. メンタル・スペース理論と値踏みの場合

ここで本論文での主張と、メンタル・スペース理論の異同について述べておきたい。Epstein (1999)は本稿で問題にしたものと類似の定名詞句の用法を、メンタル・スペース理論で言うところの「役割」解釈だとした。次の例では部屋にはふつう壁は4面あり、レストランにはメニューがたくさんあり、金持ちの家では女中は一人ではなく、また町に病院が一軒とは限らない。

- (22) a. The boy scribbled on *the living-room wall*.
b. Waiter, I demand to see *the menu* !
c. No problem, I'll get *the maid* to do it.
d. When I was six years old, I had to spend a night in *the hospital*, and I was terrified.

Epsteinはこの例についても定名詞句の唯一性の制約は役割レベルでは守られているとする。なぜなら定名詞句は唯一の「役割」を指示しているからである。現実には値となる指示対象は複数あるのだが、値としては卓越性 *salience* が低く、相互の差異は問題にされていない。この定名詞句は、唯一の役割をさしながら、卓越性の低い値としての指示対象に間接的に言及する手段であるという¹¹⁾。

Epsteinが強調するもうひとつの点は、このような定名詞句の使用には認知的フレームが必要だという点である¹²⁾。例(22)の a. では“room frame”, b.では“restaurant frame”, c.では“(rich man’s) house frame”が働いている。この認知的フレームは、Furukawa & Naganuma (2000)が「半内包的用法」と呼んでいる *l’aile de la voiture, le coin du bureau* や、*a taxi* → *the driver* のような連想照応において本質的に重要な機能を果たしているものである。このように問題の定名詞句の用法にフレームの重要性を認めることは、どちらか片方の足を折ったという状況で *Il s’est cassé la jambe.* と単数定名詞句を使うことが、身体部分の名称において頻繁に見られるという現象の説明となる。身体部位は典型的なフレームをなすからである。このフレームの概念は、本稿第3節で展開した名詞句の存在論のうち関係型 Functionals の概念と非常に近いものである。これを例 (2) の *Sonnez. Le boucher vous conseillera.* にまで拡張して適用するならば、この *le boucher* は“boucherie”フレームのなかの役割をさすということになるだろう。

また井元 (2000)も問題の定名詞句の用法を「役割」解釈だとしている。井元の再定義する役割解釈とは次のようなものである。定名詞句の表す関数を $f(x)$ とする。 m は変数、 M は定数とおくと、 $f(m)$ は役割、 $f(M)$ は値に相当する。これに加えて f が特定のフォーカススペースに置かれても、 $f(M_1)$ と $f(M_2)$ を区別しない読みを役割読み、区別する読みを値読みとするという定義を加えている。この定義により役割読みとされるものには次のようなものがある。「変化述語の主語」 *Le Président a changé.*¹³⁾、「属性的用法」 *Elle aime bien attacher son chapeau avec un ruban.*、「複合的読み」 *Chaque année, le président distribue deux milliards aux fonctionnaires.*¹⁴⁾、「存在量化的総称」 *Depuis 1969, l’homme marche sur la lune.*、「特殊な属性読み」 *Jacques n’aime pas sa femme, il aime la fille du patron.*¹⁵⁾、「不特定読み」 *Ursula veut épouser un millionnaire.*、「特殊な属性読み」 *Since I heard it from a doctor, I’m inclined to take it seriously.*

このように多様な用法の定名詞句を役割読みとする際の問題点をひとつ指摘したい。メンタル・スペース理論では定名詞句の本来の意味は役割であり、役割にパラメータが付与されることで値が決まるとされている。よくあげられる例は *le président* である。この関数は国 { x | アメリカ合衆国, 韓国, フランス, etc } と時代 { y | 2001年, 2000年, 1999年, etc. } というふたつのパラメータを持つ $f(x, y)$ とされる。 x =フランス, y =2001年を選べば、値は Jacques Chirac になる。 *le président* がよく例に引かれるのはパラメータを考えやすいからである。「大統領」「妻」「夫」のように語彙的にその役割的性格が明確で、パラメータを想定しやすい名詞については問題ない。役割と値のちがいは明白である。しかし、次のようなケースはどうだろうか。

- (23) [大きな屋敷の玄関の間で、ドアは4つありすべて閉じている。話し手は外出用の服を着て手にはスーツケースを持っている]
Ouvrez la porte, s'il vous plaît.

ドアはその場に4つあるのだから、唯一性の条件に違反している。にもかかわらず、聞き手は浴室や台所に通じるドアではなく、玄関のドアを開けるので、この定名詞句の指示は成功する。この *la porte* を「役割」と解釈するならば、その値を決定する際にパラメータとなるものが必要だが、この場合それは考えにくい。役割と値とはペアで働く概念であり、*La capitale de la France*(役割) est *Paris* (値). のようなコピュラ文で最も明確に定義される。上に引用したような様々な定名詞句(不定名詞句も含まれている)を一括して「役割」解釈と総称するのは、役割という概念にあまりに大きな負荷を課すことになり、値(=個体同定)でないものはすべて役割であるということになりかねないのではないだろうか。それでは役割は *waste basket* になってしまう。

例(23)についてはもうひとつ問題がある。井元は役割を値 $f(M_1)$ と $f(M_0)$ を区別しない解釈と定義した。(23)ではその場に候補となるドアは4つある。しかしここではまさにドアの区別が重要で、浴室や台所に通じるドアではなく、玄関のドアを開けなくてはならないのである。筆者は東郷(à paraître)において、定名詞句を「値踏み場」を領域(=入力)とし、外延を値域(=出力)とする写像関数であると定義した。(23)はいわゆる「外部指示的用法」の定名詞句であるが、ここで入力として働くのは「外出」という認知的フレームが発話状況に重ね合わされることで形成される値踏み場である。この値踏み場で該当するドアはひとつしかない。これを値を問題にしない役割解釈と言うことはできないだろう。

これと同様に例(2) *Sonnez. Le boucher vous conseillera.* でも、*le boucher* は *Sonnez.* が開く値踏み場(=客であるあなたが肉を買おうとしている場面)に存在が前提されている肉屋をさすのである。

6. おわりに

最後に Furukawa (1997) が内包的用法としている次の例についても、同じ分析ができるという可能性を示唆しておきたい。

- (24) — *Bigéard, revenons à votre mère. Elle vous a connu général ?*

— Non, malheureusement, et je le regrette bien. Ma mère est morte à quatre-vingt-quatre ans. J'étais encore colonel, je commandais à ce moment-là une brigade de parachutistes à Pau. Ma mère est morte à l'hôpital, d'un cancer. (Furukawa 1997)

定名詞句 l'hôpital は先行文脈によって開かれた「母親の死」という過去の時点 t_1 に位置づけられた値踏み場を通して把握される。この定冠詞が含意する唯一性は、「母親の死の場面」という過去に位置づけられた局所的な値踏み場でのみ成立する唯一性である。またこの型の定名詞句は、値踏み場での存在前提を伝達するが、Functionals 型の定名詞句と同様、個体にまで至る対象の同定を要求しない。このため「どの病院で?」という質問を誘発しないのである。
(京都大学)

【注】

*本研究は文部科学省科学研究費(基盤研究(C) 課題番号10610513)の助成を受けて行われた。

- 1) 定名詞句には、定冠詞句 la voiture, 所有形容詞句 ma voiture, 指示形容詞句 cette voiture が含まれるが、本稿で考察の対象とするのは定冠詞句のみである。以下で定名詞句というときは、断りのない限り定冠詞句をさす。
- 2) 単数形の定名詞句の場合「唯一性」は文字通り対象がひとつに限られることを意味する。複数形の定名詞句のときは、複数の対象からなる唯一のグループをさすことを意味する。
- 3) \exists は存在量化子, P は述語 professor, \wedge は連言記号 (and), \neg は否定, D は述語 drunk を表す。この式を日常言語に置き換えると “There is a x who is a professor, and there is no y such that y is a professor and non-identical to x , and x is drunk.” となる。
- 4) Martin はこの状況では定冠詞の単数形だけが可能で、もし複数形 les bouchers を使うと何人もの肉屋が同時に一人の客の応対をするという意味になるとしている。
- 5) 話し手はタクシーに乗ったのだから、当然運転手を目撃しており知っている。ここで問題なのは聞き手の側から見て指示説が成り立つかという点である。定・不定の区別は「聞き手依存」hearer-driven である。このことは、厳密に言うと、「話し手にとっての指示」と「聞き手にとっての指示」を区別しなくてはならないという議論に発展するのだが、ここではこれ以上追求しない。
- 6) これがすべての定名詞句に共通する意味であり、これ以上のものではない。言い換えれば、「存在前提」が定冠詞 le の本質的意味であるということである。
- 7) もう少し正確に言えば、定名詞句は筆者が談話モデルと呼ぶモデルを構成する「共有知識領域」「発話状況領域」「言語文脈領域」のどこかに指示対象が存在するという前提を伝達する。詳しくは東郷 (1998), 東郷 (1999), 東郷 (2000) を参照のこと。
- 8) 坂原 (1996) は「定冠詞句 the N は、要素の同定を要求するが、同定すべき要素がカテゴリー- N に属するという情報しか与えない。どのような理由で同定可能かは、言語的には表現されていない」と述べている。
- 9) Circumstance of evaluation を「値踏み場」と訳したのは野本 (1979) である。本論文の査読委員の一人から、「値踏み場」という訳語は意識に過ぎるとの指摘があったが、ここでは野本の訳に従うことにする。
- 10) 値踏み場は、時間 (t) ・場所 (s) ・可能世界指標 (M_i) に束縛された一種のミニ世界と

見なすことができる。このミニ世界をどのように表現するかという技術的細部にはここでは立ち入らない。

11) “By saying, for instance, *The boy scribbled on the living-room wall* or *I demand to see the menu* !(...) we indirectly access an entity of relatively low salience (a value whose precise identity is of little importance) via the direct mention of a highly salient entity, the role, which itself is very relevant.” (Epstein 1999 : 127)

12) ここでフレーム frame というのは、Minsky (1977) に端を発する概念をさす。例えば「クリスマス」というフレームには、デフォルトで「サンタクロース、クリスマスツリー、プレゼント、靴下、煙突, etc.」などが含まれる。フレームは文化的に規定され、われわれの知識に蓄えられているとされる。

13) 大統領が交代したという意味の解釈。

14) 任期半ばで大統領が交代しているという状況での読み。

15) *sa femme = la fille du patron* での読み。

【参考文献】

池内正幸 (1985) : 『名詞句の限定表現』 (新英文法選書第6巻) 大修館。

井元秀剛 (2000) : 「メンタルスペース理論における総称名詞句」, 第33回フランス語学談話会ハンドアウト

坂原 茂 (1996) : 「英語と日本語の名詞句限定表現の対応関係」 『認知科学』 Vol. 3, No.3, 38-58.

東郷雄二 (1998) : 「談話モデルと指示」 『話し言葉のフランス語に見る文法の形成過程の研究』 文部科学省科学研究費成果報告書 (課題番号07610492)

東郷雄二 (1999) : 「談話モデルと指示 — 談話における指示対象の確立と同定をめぐって」, 『京都大学総合人間学部紀要』 第6巻, 35-46.

東郷雄二 (2000) : 「談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア」 『京都大学総合人間学部紀要』 第7巻, 27-46.

東郷雄二 (à paraître) : 「定名詞句の外部指示用法について」 『京都大学総合人間学部紀要』 第8巻.

野本和幸 (1979) : 『意味と世界』 法政大学出版局。

Birner, B. & Ward, G. (1994) : “Uniqueness, familiarity, and the definite article in English”, *BLS* 20, 93-102

Christophersen, P. (1939) : *The Articles. A Study of their Theory and Use in English*, Munsgaard.

Corblin, F. (1987) : *Indéfini, défini et démonstratif. Construction linguistique de la référence*, Droz.

De Mulder, W. (1984) : “La 'création du monde' par l'article défini *le*, marqueur évidentiel?”, *Langue française* 102, 108-120.

Ducrot, O. (1972) : *Dire et ne pas dire*, Hermann.

Epstein, R. (1999) : “Roles and non-unique definites”, *BLS* 25, 122-133.

Fraurud, K. (1996) : “Cognitive ontology and NP form”, T. Fretheim & J.K. Gundel (eds) *Reference and Referent Accessibility*, Benjamins, 65-88.

Furukawa, N. (1997) : “Les Glaneuses de Millet : emploi intensionnel de LE(S)”, *Revue de*

- sémantique et pragmatique* 2, 169-181.
- Furukawa, N. , Naganuma, K. (2000): “A propos de l'emploi «quasi-intensionnel» de l'article défini : *la copie du dessin et a copy of the drawing*”, *Actes du XXII^e congrès international de linguistique et philologie romanes*, vol. II, Sens et Fonctions, Max Niemeyer Verlag, 243-250.
- Galmiche, M. (1989) : “A propos de la définitude” , *Langages* 94, 7-38.
- Hawkins, J. A. (1991) : “On (in)definite articles : implicatures and (un)grammaticality prediction”, *Journal of Linguistics* 27, 405-442.
- Kadmon, N. (1990) : “Uniqueness”, *Linguistics and Philosophy* 13, 273-342.
- Kaplan, D. (1989) : “Demonstratives”, J.Almog, J.Perry & H.Wettstein (eds) *Themes from Kaplan*, Oxford UP, 481-563.
- Kleiber, G. (1983) : “Article défini, théorie de la localisation et présupposition existentielle”, *Langue française* 57, 87-105.
- Kleiber, G. (1986) : “Pour une explication du paradoxe de la reprise immédiate”, *Langue française* 72, 54-79.
- Kleiber, G. (1990) : “Sur l’anaphore démonstrative”, M. Charolles, S. Fisher et J.Jayez (eds) *Le Discours : représentations et interprétations*, Presses Universitaires de Nancy, 243-263.
- Lambrecht, K. (1994) : *Information structure and sentence form*, Cambridge UP.
- Lyons, C. (1999) : *Definiteness*, Cambridge UP.
- Martin, R. (1986) : “Les usages génériques de l’article et la pluralité”, J. David et G. Kleiber (eds.) *Déterminants : syntaxe et sémantique*, Klincksieck. 187-202.
- Minsky, M. (1977) : “Frame-system theory”, P.N.Johnson-Laird & P.C. Wason (eds) *Thinking. Readings in Cognitive Science*, Cambridge UP, 355-376.
- Ogden, C.K. & Richards, I.A. (1923) : *The Meaning of Meaning*, Routledge.
- Russell, B. (1905) : “On denoting”, *Mind* 14, 479-493.